

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

最近の新聞記事やテレビニュースを見るたびに、高度情報技術化社会の良い面と悪い面とが混在する大変な時代が到来してきた感がするようになった。

そして、その良悪を判断する我れ我れ人間のソフトの面、いわゆる最も重要な思考力や判断力、健全なる批判力が失なわれている気がしてならない。

特に問題なのは、聖職であるべき教師の不正採用事件で次世代を担う子供達や若者までに、我れ我れ大人に対する最大の信頼を失ってしまったことである。

又、うまくゆかないのは過去の教師のせいだと短絡的思考力で殺人に及ぼうとした事件の発生。不特定の人々に対する無差別殺人事件、あるいは自分の親に対する殺人事件等、日本は過去には考えられなかった殺人天国になってしまった。

結論としていえることは、教育面で、人間社会が最も必要とする人間的資質、道徳心を教え育むことが失なわれたせいだと愚考する。

善とは何か（善とは正しいこと、道徳にかなったこと、良いこと。）、悪とは何か（人倫に反する行為などの道徳的悪、正義、道徳、法律に反すること。）を真剣に考えることだと思う。

そこで、今回は仏教でいう五悪とは何か、十悪とは何かを考え、現実の世の中は、決して無差別平等ではない事実を学び知り、差別のある実社会で真面目に努力する考え方について考えてみたいと思う。

特に仏教の教えの中で殺人は五悪でも十悪でも最もいみじらわれている行為である。

仏教でいう五悪、十悪について考えてみると

1) 「五悪」とは。

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
(野風生)
雅号 樹泉

殺生、^{ちゅうとう}偷盗、邪淫、妄語、飲酒をさす。

2) 「十悪（十不善業）」とは。

殺生、偷盗、邪淫、妄語、^{きご}綺語、悪口、両舌、貧欲、^{しんい}瞋恚、邪見（又は愚痴）の十種の不善業をいう。

いづれも身、口、意の三業、いわゆる身体的活動と言語的活動と精神的活動によって造られる十種類の罪悪をさしている。

要は、現実問題として、いろんな不正事が世の中に^{はんらん}氾濫している事実を認め、それ等に対してきびしく対応することだと思われる。

善悪の区別、それは「やって良いこと」と「やって悪いこと」の区別のできる人間になることであり、

「差別」、「格差」の存在を認め「他思故有我」の仏教的思考力と慈悲心を持ってささやかながら他の模範となる生き方を心がけることだと思う。

2. 大疑則大進、小疑則小進、無疑則無進

大疑則大進（たいぎすなわちたいしん）、小疑則小進（しょうぎすなわちしょうしん）、無疑則無進（むぎすなわちむしん）とは、「現状に大きな疑問を持つと大きく進歩し、現状に小さな疑問しか持たなければ小さくしか進歩をせず、全く疑問すら持たなければ、全く進歩すらない」ということで、個々に述べると、

大疑則大進とは「人間、如何なる立場になっても常に現状に大きな疑問を持つと結果として、大いに進歩する」ことで、

小疑則小進とは「現状に小さな疑問しか持たないと結果として、小さくしか進歩しない」ことを意味し、

無疑則無進とは「現状に全く疑問を持たず無関心でいると結果として、何も変わらず進歩しない」ということである。

したがって、人の上に立つ経営者や管理者は、常に現状に大きな疑問を持ち、問題点の有無をさぐる姿勢が必要であるという物の見方、考え方の教えである。

良く上司や担当管理者が変ると、業績の伸びる部門や逆に下がる部門が生じることがある。

これは、部下が変らないのに上司や担当管理者が変って生じた管理能力の有無を問われる問題である。

ここで、最も大切なことは新しく昇進や登用された人材を問わず、常に自分の置かれた立場を考え、何か問題は無いのか、何が問題なのかを考える姿勢を持つということが重要だということである。

現状に不満や不平を持つ部下がいるとしたら決して業績の向上は望めない。一番こわいのは、現状に甘んじる上司や管理者にならないことである。

「無疑則無進」はさけて通りたいものである。